広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | 大学初修中国語におけるオンライン教育の試み : covid-19下の2020年度広島大学インテンシブ中国語連動クラスを中心に |
| Author(s) | 荒見, 泰史 |
| Citation | 広島大学森戸国際高等教育学院紀要 , 4 : 1 - 21 |
| Issue Date | 2022-03-31 |
| DOI | |
| Self DOI | 10.15027/52357 |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052357 |
| Right | |
| Relation | |

# 大学初修中国語におけるオンライン教育の試み

## ── covid-19 下の 2020 年度広島大学インテンシブ中国語連動クラスを中心に ──

荒見泰史

## １．はじめに

筆者は、2019 年度までに担当してきた広島大学初修外国語［インテンシブ中国語］連動クラスでの教育において、担当教員との工夫の中で一定の効果を上げてきた。特に 2019 年度では、インテンシブクラスではありながら、履修希望者増加の関係からクラスサイズを 54 名にまで拡張せざるを得なかったが、その教育効果は下がることはなく、従来と遜色ない効果を上げることができたと自負している[1]。

これに続く 2020 年度では、2019 年度で実施していた方法で大人数クラスでも対応可能との経験に拠り、更なる受講者増加にも対応できるとの安心感を持ち新年度の準備を進めていた。しかし、2020 年 2 月初旬あたりから日本国内でも危機意識が高まったコロナウイルス（covid-19）の脅威の中、4 月には広島大学全学として少なくとも第１ターム（Term、以下 T と略称）はオンライン授業を基本とすることに決定され、急遽オンライン対応の授業に切り替えざるを得なくなった。筆者も、担当教員もみなオンライン授業の経験は皆無で、できる限り 2019 年度までの方法を反映できるよう検討し、オンラインの中で一定の工夫を凝らした。止むを得ざる措置とはいうものの 2020 年度モデル（以下［広大 2020］）では、オンライン故に立て続けに起こる問題対応に追われつつ、中には思いもかけない教育効果が見られていることにも気づいた。本稿は、その［広大 2020］の前期の試みについて、自らの備忘の為に記録するのと同時に、今後も続く可能性のあるオンライン授業をより有意義なものとし、同様の状況に対応する多くの教員の参考になればと広く公表することとした次第である。筆者たちの経験は、多くが初の試みでもあり、教員チーム内及び受講者に苦労を強いる点も多々あったと思う。ここに詳細を報告して感謝の気持ちを表したいと思う。

## ２．広島大学中国語履修者の現状

広島大学初修外国語の中国語の履修希望者は、ここ 15 年ほどを見ていると全体的に増加傾向を続けている。2012 年度後半に尖閣問題を発端に中国で起こった反日デモとその報道を受け、2013 年度から 2015 年度まで一旦は人数が減少したが、その前の

---

[1] 荒見泰史、「明海大学の新中国語教育システムについて」、『応用言語学研究』第 10 号、2008 年、187-202 頁。荒見泰史、「初修中国語教育改善への一提案」、『応用言語学研究』No.13、2011 年、61-78 頁。

2008 年度 718 名、2009 年 615 名、2010 年度 767 名、2011 年度 786 名、2012 年度 735 名と、長い時間軸で推移をみるとここ 15 年間少しずつ増加していると言ってよい。

以下に、広島大学の初修外国語履修者数、中国語履修者数と、そのうちのインテンシブ中国語の履修者数について見ていただきたい。

**表１　広島大学の初修外国語履修者及び中国語履修者の推移**

| | 2015 年度 | 2016 年度 | 2017 年度 | 2018 年度 | 2019 年度 | 2020 年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 初修外国語履修者総数 | 2346 人 | 2315 人 | 2352 人 | 2288 人 | 2351 人 | 2291 人 |
| ベーシック中国語希望者総数 | 597 人 | 806 人 | 848 人 | 931 人 | 942 人 | 971 人 |
| 内インテンシブ中国語希望者 | 26 人 | 51 人 | 53 人 | 51 人 | 107 人 | 100 人 |
| ベーシック中国語履修者中のインテンシブ中国語履修者比率 | 4.64% | 6.55% | 6.56% | 5.69% | 11.84% | 10.67% |

上記表にある［ベーシック中国語］とは、全学必修の初修外国語の中の中国語の科目名（広島大学では学部、専攻により半年間 2 単位 60 時間と 1 年間 4 単位 120 時間履修する 2 つのケースがある）で、［インテンシブ中国語］というのは、選択式で先の必修［ベーシック中国語］に加え［インテンシブ中国語］（1 年間 4 単位 120 時間履修）を履修し、原則として週 4 コマ年間 240 時間を学習するクラスを指す（以下、両連動科目を履修するクラスを「インテ連動クラス」とする）。

この中国語のインテ連動クラス履修者率が徐々に増加しているのは、一つには経済学部と法学部の両学部学生が増加したことによる。2015 年度以前は経済学部と法学部では必修科目との兼ね合いで、［ベーシック中国語］とは別の時間帯に設けられている［インテンシブ中国語］が履修できにくくなっていたが、外国語教育研究センターと学部との調整により 2016 年度から一部学生が履修可能になった。さらに 2016 年度と 2017 年度の 2 年度をかけて必修科目との時間調整や学生への周知も進み、現在のように希望する学生が平等に履修できるようになったのである。

また、先にも言うような 2013 年度から 2015 年度までの中国語離れの時期には、中国語インテ連動クラスの履修希望者も減ってはいたが、それ以前の中国語インテ連動クラスの希望者が 2010 年度 47 名（6.13%）、2011 年度 65 名（8.27%）、2012 年度 42 名（5.71%）であった事と比べると、2019 年度以降、履修希望者率が上昇しているのは確かであり、ここ数年、広島大学での中国語学習人気が高まってきていることは明らかである。これは全国傾向を反映しているものとも言えるだろうが、広島大学学生がインテ連動クラスでより高い語学力をつけたいという意識を高めていることは注目すべきであろう。

ちなみに、2020 年度の中国語インテ連動クラス履修者の学部ごとの人数は、調整後となる 4 月末時点で以下のような人数となる。

表２　学部別中国語インテ連動クラス履修者数

| 学部 | 人数(人) | 比率(%) |
|---|---|---|
| 総合科学部 | 22(6)＊ | 20.75<br>(5.66) |
| 文学部 | 21 | 19.81 |
| 教育学部 | 13 | 12.26 |
| 経済学部 | 28 | 26.42 |
| 法学部 | 22 | 20.75 |

＊( )内は国際共創学科(IGS)の学生数数（内数)

一見してわかるように経済学部、法学部学生が半数を占めており、2016 年度以降の中国語インテ連動クラス履修者増加の主な理由となっていることがわかる。

## ３．クラス編成とその後の変化

2020 年度は例年より若干遅く 4 月 1 日に初修外国語のクラス編成作業が行われることになった。その時点では、広島大学全学ではコロナ・ウイルス蔓延により 4 月以降に授業をオンライン化する可能性はすでに議論され、3 月 23 日には「第１T でオンライン授業を行う科目は 4 月 8 日（水曜日）に開始する。ただし、オンライン授業の準備などで授業によっては終了が遅れることが想定されるので、第１T 末に 1 週間の予備日を設定する。」が通知され、3 月 31 日と 4 月 3 日に全学対象としたオンライン授業のための講習会が行われていた。この間、英語教育を含む外国語教育担当教員の間では、対面による授業実施の可能性も考え、当時としては最大限の安全性を考慮したうえで教室サイズに合わせたコロナ・ウイルス対策用の定員を設定し、クラス編成作業をおこなう準備をしていた。編成作業が例年より数日程度遅くなっていたのもその準備のためであった。ただ、その作業と前後して、初修を含む外国語教育に関しては授業のオンライン化が決定されるであろうとの予測情報が入っており、クラス編成作業修了後には直ちにその対策も話し合われた。このように慌ただしい中でクラス編成作業が行われたのである。

そして、4 月 3 日付で発出された全学の方針「2020 年度 第 1、第 2 タームの授業等の実施に関する方針」で、授業開始とその方法に関する通知文が発出された。その関連部分を挙げておく。

１）授業開始日について

・4 月 8 日（水）にはオンラインで実施する授業のみを開始し、対面的要素が伴う授業については、5 月 7 日（木）開始とする。

・但し，オンラインで実施する授業のうち，学部１年生対象の科目（教養教育科目、専門教育科目）については、すべて４月 15 日（水）から開始とする。

・第 1 タームの最後に予備日（6/9（火）から 6/15（月）まで）を設ける。それに伴い、 第 2 タームの開始日が 6/16（火）、最終日が 8/13（木）となる。

・授業の遅れは、第１ターム最後の予備日、土日、オンライン授業による補講などで吸収する予定である。

そしてこれに即した新学年暦が４月７日付で全学の通知「新型コロナ・ウイルス感染症に伴う学年暦（授業スケジュール）の変更について（2020.4.6)」として発出されることになった。

上の通知は、(1)原則授業開始は変更なし、(2)オンラインにより授業を始める、(3)1 年生は入学間もなく network 教育にも余裕がいるので１週間遅らせる、(4)Covid19 の状況を見るために対面授業はゴールデンウイーク明けに判断する、といった骨子によるものである。いずれにしても、1 年生を主たる対象とする初修外国語の授業実施は、オンライン授業のための１週間の猶予が与えられることになった。この間に、あわただしく学生への通知、教員間でのオンライン授業のための勉強会などが行われることになったのである。

直ちに、外国語教育研究センターが主導するオンライン研修会が企画された。以下にその時の詳細も記し、研修会を企画実施された先生方にはここに改めて感謝申し上げる。

４月 ９日（木）10:30～東広島キャンパス総科 J307CALL、Bb9 の解説＋初修の事例紹介
４月 ９日（木）10:30～東千田キャンパス未来創生センター2 階（計算機室)、Bb9 の解説のみ
４月 ９日（木）13:30～東広島キャンパス総科 J307CALL、Bb9 の解説＋初修の事例紹介
４月10 日（金）15:30～東広島キャンパス総科 J307CALL、Bb9 の解説＋初修の事例紹介

Bb9 というのは、Blackboard Learn R9.1 の略称で、アシストマイクロ社の運営するＬＭＳ（学習管理システム）Blackboard を広島大学オンライン学習支援システムとして使用する時の名称である。掲示板を使った学生への連絡から映像教材にまで至る教材の配信と、課題提出、成績の管理などができる。以前より広島大学では利用されていたが、コロナ以前の普及率は決して高いとは言えなかった。しかし、オンデマンド型の授業を行う場合には大変便利であり、現在では広島大学で行われる授業のすべてが自動的にこのシステムに登録され、多くの教員が利用するようになっている。

研修会では、こうした Bb9 など、広島大学でオンライン授業を行うより簡便な方法が紹介されたが、中国語担当には日本語ノンネイティブの客員教員が多く、不安を持つ教員も見られたので、中国語教員を対象とした説明会、オンライン授業の勉強会を上記研修会と同日の４月９日 14:20 より行った。そこでは中国語を使った Bb9 の使用

方法の講習と、オンデマンド型教育で必要となるパワーポイントでのビデオ動画の作成方法の勉強会を行った。言うまでもなく、教員たちの中でこうした教育の経験を持つものは少なく、意見交換では様々な質問があったが、基本的には個別教員でできることを考えるというレベルでしかなかったと言える。授業開始までわずか1週間のことで、一部の大学で行われているような大学で統一的なオンデマンド教材を作成して配信するという方法に至る議論の余裕はなく、結論的には個別に検討してできる方法を考え、SNS でのグループを作り互いに情報共有するということになった。

かくして 4 月 15 日（水曜日）には 1 年次の授業も始まり、翌 4 月 16 日（木曜日）には初修外国語の第 1 回目の授業を迎えた。

その後、学生の混乱をできるだけ避けるために、関連部署から 4 月 23 日シラバス修正の依頼があり、より学生を適切に誘導できる詳細なシラバスへの書き換えも行われた。すでに授業が始まってからのシラバス変更となったが、初めの 2 週間程度は学生誘導で若干の混乱に止まり、こうした細やかな作業も重要な意味を持っていたと思われる。

## ４．中国語オンラインモデル授業［Hiroshima Model 2020］概要

筆者が2020年度に担当することになったのは中国語インテンシブ連動クラス2クラスで、履修学生はそれぞれ 43 名と 34 名となった（調整後）。週 4 回受講するこの両クラスのそれぞれの時間割と担当教員を一覧にすると以下表 3 のようになる。それぞれのクラスがほぼ同じ顔ぶれの計 4 名の教員とで担当する。これに加え、TF が 1 名、QTA が 1 名、それぞれのクラスに週 1 回つくことになっていた。広島大学では、ステップアップ型の TA 制度を採用している。学部学生の Phoenix Teaching Assistant（PTA）に始まり、博士課程前期以上の学生で一定の資格を持つものが Qualified Teaching Assistant（QTA）として教員の補助として授業に関する一定の作業を行え、そのステップを経た後に博士後期課程学生は ［大学教育入門］などの教育を経て Teaching Fellow（TF）として授業の一部を担当することができるという、段階的に教員としてのスキルを学べる制度となっているのである。

この 6 人のメンバーで教員チームを組織し、当初より『新概念漢語』という筆者が 16 年間使用している実験教材を統一教材として使用し、そのほかに一冊程度別教材を使用し不足を補う予定で計画を進めた[2]。本教材は、2017 年度から授業用のパワーポイントや補助教材を作成しており、新任の客員講師一名以外は TA も含めてこの教材の使用経験があった。

[2] 前掲拙稿「明海大学の新中国語教育システムについて」、「初修中国語教育改善への一提案」に詳述。

表３　筆者担当の中国語インテンシブ連動クラス時間割とほかの担当者

| | 月曜日 | 火曜日 | 木曜日 | 金曜日 |
|---|---|---|---|---|
| クラス①（43 名） | 9,10 限<br>インテンシブ中国語ⅠA（客員教員 A） | 5,6 限<br>ベーシック中国語（荒見泰史） | 5,6 限<br>ベーシック中国語（客員教員 B） | 9,10 限<br>インテンシブ中国語ⅠA（客員教員 C） |
| クラス②（34 名） | 9,10 限<br>インテンシブ中国語ⅠA（荒見泰史） | 7,8 限<br>ベーシック中国語（客員教員 A） | 7,8 限<br>ベーシック中国語（客員教員 B） | 9,10 限<br>インテンシブ中国語ⅠA（客員教員 A） |

＊他、週 1 回 TA（TF1 名、QTA1 名）がそれぞれのクラスを担当

オンライン授業と決まりオンライン研修会が開かれた 4 月 9 日に、TA2 名を含む 6 人の教員チームで改めて授業の進め方について話し合いをおこなった。授業を一週間前に控えた不安が先にたつ状況ではあったが、まず予定通り『新概念漢語』中心とすることとし、これを使ったコンテンツを共同で作成し、週 4 回の授業に配分してオンデマンド配信することとした。

『新概念漢語』のコンセプトについてはこれまでにも幾度か紹介しているが、以下の論述上必要になるので、ここではこの基本的な考え方を示している序文の一説を紹介しておきたい。

> この教材では、漢字音、単語そして文型の順に、「聞き」、「話す」を中心にスプーン・フィードと言われるような口うつしの方法で練習できるように工夫をしてみました。その方法も、単なる暗記ではなく、インストラクターや学習者同士とのコミュニケーションを中心にして、徐々に学べるようになっています。ただ、子供たちが言葉を覚える過程とは違って、分別のある学習者が学ぶのですから、秩序立てて子供たちが学ぶのよりは効率よく学ぶことができます。『新概念漢語』では、文法的にも効率よく配置し、文法もしっかり学ぶことによってより早くスプーン・フィードの段階を抜け出し、クラスメイトとの会話も楽しみながら、楽しくコミュニケーション能力を高められるようになっている訳です。ですから、授業で多くの時間を占めるのは、講義ではなく、クラスメイトとの会話の時間になるように設計されています。
>
> （『新概念漢語（2020 年度版）』、3 頁「『新概念漢語』の基本構想」）

以上のように、この教材は「口移し」のような繰り返し練習、クライメイトとの会話練習にすぐに使えるパタンとその組み立ての練習が基礎となっている。この練習を確保するためには、オンラインではあっても徹底したパタン練習と、ペアワークの時間確保は必須と思われた。この 4 月の時点ではインターネット上のトラブルを避けるために、コンテンツ配信型のオンデマンド型教育が推奨されていたが、筆者らの教育方法の特徴から考えると教育効果低下の懸念があったため、様子を見ながら同期型での授業が行えるよう準備を進めておいた。結果として、学期始まって 2 週間ほどで Zoom を利用した同期型とコンテンツ配信のオンデマンド型を組み合わせた授業形態とする

形に変更した。この時点で、同期型の授業でのペアワークを効果的に進めるためのコンテンツ設計を行うことになったのである。これは、ちょうど発音練習を終える頃にあたり、ある意味都合の良いタイミングだったとも言える。できることなら一貫した方法で一年間教育するのが教育上望ましく、コンテンツの基本的な形も4月第一回授業の前に詰めておく必要があったが、そのタイミングに間に合うぎりぎりのタイミングだった。

コンテンツ作成、授業担当に関しては、担当教員の作業時間、労働時間も考慮しなければならなかった。担当授業時間内での作業ではないことなど、雇用条件にもかかわることだけに注意しなければならないが、この時点ではどこまで通常に近い教育できるか全くわからない状態で、関係事務とも確認を取り合ったうえでそのように決定された。作業時間には留意するように話し合ったが、実質上どれだけの労働量になるか見当もつかない状況だったともいえる。

そうした点に気を配りながら、その時に決められた作業分担は以下のとおりとなった。作業をあまり複雑化させないという意図もあっての分業体制であった。

1．ビデオ教材①（教材解説）
2．ビデオ教材②（復誦練習）
3．同期型オンライン授業（主にBreakout Session機能を使った対話練習）
4．筆記による練習と採点
5．筆記による宿題と採点

以上の5項目を4人で分担し、3と4の採点の一部をTAに託し、教員はそのフィードバックができる体制を取ることにした。

## 5．オンデマンド配信用コンテンツについて

以下に、とくに上の「1．ビデオ教材①（教材解説）」については詳細に説明しておきたい。

先にも言うように、教材は筆者らの編著になる『新概念漢語（2020 年度版）』と決まっており、著作権上の心配はなかった。また、同書による教育では2017年度以降にはすでに授業用PPTを用意していたので、そこに録音する形で動画を作成することで、かなりの省力化されることとなった。授業全体の進め方（勉強の仕方）、発音用教材については、とくに説明用のビデオを作成して対応することにはなったが、全体としてはやや楽観的なスタートとなった。

オンライン教材の場合、8分程度、長くても20分を超えないのが望ましいとの研究があるとの教示を受けており、内容を課ごとに短く切り分けて調整していく必要があった。結果として、最初のガイダンス及び発音教育用コンテンツ8本のほか、『新概念漢語』本文部分のコンテンツとして各課を以下の(1)～(6)の6種に分けることになっ

た。

『新概念漢語』本文部分コンテンツ構成
(1)ポイント
(2)単語
(3)置き換え練習用単語
(4)本文練習
(5)漢字練習
(6)復習用対話練習

以下の表は、作成されたすべてのコンテンツと、各コンテンツの時間を表示したものである。

**表 4　ガイダンス及び発音教育用コンテンツ**

| | |
|---|---|
| 2020 年度インテンシブ中国語ガイダンス | 5:07 |
| 第１講　中国語を始める前に（１）（皆さんが学ぶ中国語とは） | 8:05 |
| 第２講　中国語を始める前に（２）（日本語母語話者が学ぶ中国語） | 11:56 |
| 第３講　中国語を始める前に（３）（中国語と日本語の漢字音） | 8:47 |
| 第４講　中国語の発音（１）（単母音と声調） | 21:57 |
| 第５講　中国語の発音（２）（複合母音） | 12:57 |
| 第６講　中国語の発音（３）（鼻母音） | 18:28 |
| 第７講　中国語の発音（４）（声母・子音） | 21:53 |
| 第８講　中国語の発音（５）（２音節の発音） | 08:00 |

**表 5　『新概念漢語』第 1 課～第 27 課各課のコンテンツ**

| | (1)ポイント | (2)単語 | (3)置き換え練習用単語 | (4)練習 | (5)漢字練習 | (7)復習 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 第１課 | 14:11 | 23:21 | 23:38 | 25:03 | 14:01 | 03:59 |
| 第２課 | 14:44 | 22:32 | 11:09 | 20:03 | 14:38 | 09:28 |
| 第３課 | 13:17 | 20:59 | 22:59 | 22:18 | 17:32 | 11:25 |
| 第４課 | 26:27 | 14:32 | 14:19 | 23:11 | 10:54 | 09:16 |
| 第５課 | 14:41 | 17:29 | 18:28 | 15:54 | 09:59 | 11:15 |
| 第６課 | 23:52 | 21:43 | 16:16 | 27:26 | 14:03 | 18:23 |
| 第７課 | 16:07 | 17:14 | 12:56 | 25:00 | 14:12 | 11:39 |
| 第８課 | 24:17 | 17:14 | 24:18 | 22:42 | 15:55 | 07:21 |
| 第９課 | 30:58 | 15:53 | 23:06 | 31:27 | 12:06 | 13:50 |
| 第１０課 | 15:16 | 18:48 | 18:02 | 26:17 | 14:22 | 19:05 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 第１１課 | 26:52 | 13:01 | 20:44 | 27:32 | 15:25 | 16:10 |
| 第１２課 | 17:22 | 16:11 | 23:15 | 26:17 | 16:15 | 13:52 |
| 第１３課 | 23:19 | 12:36 | 18:20 | 22:18 | 18:09 | 14:28 |
| 第１４課 | 20:14 | 18:16 | 22:24 | 25:01 | 16:23 | 12:21 |
| 第１５課 | 14:32 | 12:15 | 19:37 | 27:17 | 14:48 | 12:43 |
| 第１６課 | 27:04 | 12:45 | 16:25 | 19:40 | 11:07 | 10:35 |
| 第１７課 | 08:48 | 11:34 | 20:07 | 22:40 | 10:24 | 10:21 |
| 第１８課 | 13:26 | 12:10 | 14:56 | 20:48 | 10:07 | 13:33 |
| 第１９課 | 11:47 | 09:15 | 16:34 | 19:29 | 11:48 | 10:46 |
| 第２０課 | 16:56 | 07:17 | 15:06 | 19:13 | 09:07 | 12:18 |
| 第２１課 | 11:57 | 09:28 | 15:18 | 18:38 | 13:01 | 11:17 |
| 第２２課 | 15:26 | 13:15 | 11:58 | 19:33 | 11:44 | 12:10 |
| 第２３課 | 16:30 | 12:29 | 17:36 | 24:32 | 10:14 | 12:50 |
| 第２４課 | 13:30 | 07:29 | 13:32 | 25:55 | 10:29 | 09:59 |
| 第２５課 | 26:24 | 07:58 | 16:39 | 27:41 | 10:55 | 12:23 |
| 第２６課 | 14:02 | 07:37 | 22:13 | 18:49 | 11:03 | 12:21 |
| 第２７課 | 23:20 | 11:59 | 17:30 | 33:26 | 10:08 | 10:38 |
| 各平均時間 | 18:21 | 14:16 | 18:03 | 23:38 | 12:55 | 12:01 |

各コンテンツ平均 16 分 32 秒

以下に『新概念漢語』基本コンテンツについて順に見ていこう。

「(1)ポイント」は文法項目等の説明であり、できるだけ簡潔でわかりやすいコンテンツとする必要があった。もともと文法説明は 10 分を超えないよう心掛けてきたので、それほど問題ないかに思ったが、説明だけのコンテンツでは学習者が注意深く見ていない可能性があり、適宜パタン・プラクティスを挿入することとした。これにより、時間は若干長くなることは避けられなかった。結果として、作成した全 27 回の平均時間数は 18 分 21 秒とやや長めとなった。

新出単語は、時間の関係上「(2)単語」、「(3)置き換え練習用単語」に分けることとした。各課で 30 語程度の新出単語があり、文の組み立てまでの練習だと、それでも 10 分以上にはなる計算だった。問題は、「(2)単語」、「(3)置き換え練習用単語」の単語量が必ずしも均等にはなっていないので、長い回、短い回の差ができるという問題があった。これは最後まで修正できなかったが、後述する同期型授業の中で、ケアと調整を行った。「(2)単語」の全 27 課の平均時間数は 14 分 16 秒、「(3)置き換え練習用単語」の平均時間は 18 分 03 秒となった。

「(4)本文練習」は、本教材では最も重視する型を練習する部分であり、本来であ

れば同期型授業の中で行うべきと思われた部分だが、結果としてZoomなどの使用では、教室での場合のように全員で声を出すことの高揚感、いつあてられるかわからない緊張感などの演出は難しいと判断され、むしろ同期型授業では発音と内容の確認、型を使った応用、ペアワークを徹底したいとの思いから、型を繰り返す従来型のパタン・プラクティスをコンテンツの中で練習できるように準備することになった。学生には、同期型授業の中でこの練習の重要性を強調し続けたが、授業時間の時のような強制力を持たせることは難しく、一番不安な部分であった。「(4)本文練習」の全27課の平均時間数は23分38秒とやや長めになった。

「(5)漢字練習」については、ここに若干補足しておきたい。本メソッドで長年強調してきている漢字練習とは、漢字をよく知っている日本人にとってはとても効果的な学習法である。日本人は「漢字が書け、意味もある程度わかっているが、中国語音は学んだことがない」と言う点が中国語学習でネックになる。逆に言えば、中国語音をしっかり学び、音と漢字が結びつくようになれば、多くの語の意味は分かることになる。「漢字の中国語音をしっかり学び、音を聞いて文字と意味が頭に浮かぶようになれば、中国語を学ぶ早道になる」という考え方である。またこれを漢字一文字一文字できちんとできるようになれば、理解できる単語（もともと知っている単語）も増える。例えば、「中国」、「大学」の2語を学んだ時に、モーラ的に音の塊で覚えるのではなく、音節で分けて「中」、「国」、「大」、「学」それぞれの漢字音を独立させて理解できるようになれば、「中学」、「大中」、「国学」のような単語を聞いて理解できるようになる。教材の僅かな常用漢字を組み立てるだけでも多くの単語を学んだのと同じ効果が期待できる訳である。簡単な漢字クイズのような形式になったこともあり、「(5)漢字練習」の全27課の平均時間数は12分55秒とコンテンツ平均から見るとやや短めになった。

「(6)復習用対話練習」は「(4)本文練習」で練習した型をもとにして「(3)置き換え練習用単語」や既出の単語に差し替えて応用させる部分である。基本は３つのページでそれぞれ関連した連続する質問４題に答えるようになっており、すべての質問に中国語で回答すると自然な会話ができたような印象を持つことができる。できなければ何度も繰り返し練習できるところはオンライン教材のよいところではある。また、この練習が同期型授業でクラスメイトとのペアワークに応用されることは学生たちも承知しており、学習動機をつける重要な部分に位置づけられている。「(6)復習用対話練習」の全30課の平均時間数は12分01秒であった。

コンテンツは各課すべて以上の6つの部分から構成され、平均時間も1つ当たり15分程度に抑えてある。さらに、いずれのコンテンツにも、復誦、質問などを積極的に取り入れ、「きちんと視聴していないとできるようにならない」ことを自覚できるような内容にしたつもりである。

## ６．オンデマンド教材と同期型授業との併用

初めのガイダンスと発音練習を２週間かけて行い、第３週目以降は前章に紹介してきたコンテンツを Bb9 を通じて配信した。

先にも言うように、インターネット上で同期型授業のアクセスできない学生が出た場合などの混乱を避けるために当初オンデマンド型授業が推奨されていたという経緯から、Zoom、Teams などを使用した同期型授業の場合でも、録画した画面をオンデマンドとして Bb9 にアップロードすることが求められていたが､教育効果を考えた場合、教室での教育効果にある程度近づける Zoom、Teams による同期型授業は実施したいと考えていた。こうした考え方から、教員の作業時間を考えながら、6 つのコンテンツは、基本的に授業時間内に学習するように配置し、同期型が使用できると判断された 3 週間目からは、コンテンツを見終わるタイミングで引き続き Zoom、Teams を使った同期型授業を行う形とした。5 月以降になって、オンラインの状況が当初予想していたほどトラブルが出なかったこともそのあと押しとなった。

結果として、それらの組み合わせは以下のような形として固定化された。

**表４　中国語インテンシブ連動２クラスの授業内容**

| | 月曜日 | 火曜日 | 木曜日 | 金曜日 |
|---|---|---|---|---|
| クラス① | 9,10 限<br>コンテンツ(1)、(2)配信/発音練習(1)、(2)配信 | 5,6 限<br>コンテンツ(3)、(4)配信/Zoom による同期型授業（50 分） | 5,6 限<br>Teams による同期型授業/書き取りテスト（計 90 分） | 9,10 限<br>コンテンツ(5)、(6)配信/確認テスト(/Zoom による同期型授業（50 分）) |
| クラス② | 9,10 限<br>コンテンツ(1)、(2)配信/Zoom による同期型授業（50 分） | 7,8 限<br>コンテンツ(3)、(4)配信/発音練習(1)、(2)配信 | 7,8 限<br>Teams による同期型授業/書き取りテスト（計 90 分） | 9,10 限<br>コンテンツ(5)、(6)配信/確認テスト(/Zoom による同期型授業（50 分）) |

*網掛け部分は同期型授業の部分。

**＊金曜日** 9,10 限の「Zoom による同期型授業（50 分)」は第３T 以降に調整し追加したものである。

以上は、参考例としての基本形であり、祭日などが挟まることにより、若干順序は変動することはあった。それでも、教員がコンテンツの進度を理解したうえでペアワークを行うことにより、実際の授業では「コンテンツ➡ペアワーク」はうまく機能していたように感じられた。

また、Zoom と Teams の両方が使用されるようになったのは、担当教員の都合による

やむを得ないものである。担当教員によっては、他の授業コマ、他大学での講義方法などによりTeamsを好む教員もいた。ペアワークなどは、Breakout Session機能の付いているZoomのほうが使い勝手が良いとする教員もあり、統一するのは難しいと両方を併用することになった。結果的には学生にとっては大学の電子掲示板機能(もみじ)、Bb9とZoom、Teamsの4種類の機能をフル活用させることになったが、授業形態を書面にまとめて学生に提示していたので、大きな混乱はなかったようである。なお、現時点での筆者の経験よりみて、当時の Teams でも channel 機能を使ったグループ session は可能ではあった、短時間のペアワークを何度も行う場合には Zoom の Breakout Session 機能の方が使いやすかったという印象は持っている(2020年の年末までにはTeamsにもBreakout Sessionが追加されたと聞く)。

一週間の授業時間は、結果として、コンテンツ動画での学習時間は『新概念漢語』基本コンテンツ(1)～(6)と発音練習用コンテンツ(1)、(2)の平均時間が約160分/週、同期型授業時間は140分（第３T以降は190分）の計300分（第３T以降は340分）となり、通常授業時間90分×4回（計360分）/週とおおむね一致する時間数を確保できたことになる。各教員の作業負担を抑えつつ、授業時間は確保できていることになった訳である。

なお、これらを組み合わせて行ったときに、我々が気遣ってきたのはペアワークの時間確保であった。結果的に、上の表で言えばクラス①の火曜日5,6限とクラス②の月曜日9,10限、そして2クラス合同で３Ｔ以降に始めた金曜日9,10限のZoomによる同期型授業（50分）では、コンテンツの進度に合わせたペアワーク主体の練習を行ってきた。2019年度モデルでは授業の進度に合わせて各回の授業で10分程度のペアワークを平均3回程度行ってきたのに対し（週当たりに換算して120分程度)、2020年度モデルでは１Ｔ以降50分、3T以降では100分を確保し、3T以降は2019年度モデルとそう大きく変わらない時間を確保できていたことになる訳である。教室にいるときのように、進度に合わせてペアワークを挟むという小回りは効かないが、本教材とそのメソッドを発揮するための最低限の練習時間は確保したいと考えた結果である。

結果としては次の章でも紹介するように、従来の教育効果に近い効果が見られたと考えている。

## ７．学習効果の測定（１）—第2T(1年前期修了時)の会話力測定

学習効果の測定は、毎週の小テストで確認されていたが、期末の試験を利用して会話能力の調査を試みることになった。2004年から統一的なリスニング試験、筆記試験を行ってきた蓄積があり、2019年までのモデルとの比較など、興味深い点はいくつもあり、それまでと同じ条件での試験ができないことは残念だったが、昨年度までの会話試験の多くはビデオで記録されており、別の形でそれらとの比較を試みていきたい

と考えた。

その試みの第一歩として、会話速度の測定から会話力を判定できるかどうかを試みた。

今回は、会話の流暢さを測ることを主眼とする判定方法である。中国語の会話の流暢さを、仮に「一定時間内における対話における有意の音節数」とし、実際の会話における発話の状況からこれを数字化するというものである。モーラ言語の場合には一語の音節数も一定ではなく、また有効な発話かどうかを判断することも難しいが、中国語の場合、一音節であっても発音が正しい場合には有効な発話となり得る。有意の音節と判断されれば一語とカウントできる訳である。一定時間内にどれだけの語数が発せられたかの数値を求めれば、流暢さを表すことも可能ではないか、という考え方である。まさに中国語が音節言語だからこそできる判定法と言えるかもしれない。

第 2Ｔ以降、期末試験と称してオンラインによる面接試験を行ってきた。今回は第２Ｔの分析例を挙げながら今回の測定方法について紹介してみたい。

第 2Ｔ面接試験では以下の 20 題を質問した。

**表 5　第 2Ｔ試験問題（会話）**

1. 你好！（こんにちは。）
2. 现在可以开始（考试）吗？（いま、(試験を）初めていいですか？）
3. 你叫什么名字？/请问，您贵姓？（あなたの名前を教えてください。）
4. 你家在哪里？（あなたの家はどこですか？）
5. 你家附近有超市吗？（あなたの家の近くにスーパーはありますか？）
6. 你常常去买东西吗？（あなたはしょっちゅう買い物に行きますか？）
7. 你怎么去超市？走路去还是骑自行车去？（どうやってスーパーに行きますか？歩いていきますか？自転車ですか？）
8. 今天你要去买东西吗？（今日あなたは買い物に行きますか？）
9. 你要买什么？（何を買うつもりですか？）
10. 你父母亲给你零花钱吗？（あなたの両親はお小遣いをくれますか？）
11. 你父母亲给你多少钱一个月？（あなたの両親はひと月にいくらくれますか？）
12. 你天天学习汉语吗？（あなたは毎日中国語を勉強していますか？）
13. 为什么？/你怎么学习汉语？（なぜですか？/どうやって中国語を勉強しますか？）
14. 你和谁一起练习汉语？（あなたは誰と一緒に中国語の練習をしますか？）
15. 怪不得，你的汉语那么好！（なるほど、あなたの中国語は上手ですね。）

16. 你会上网吗？（あなたはインターネット出来ますか？）
17. 你能上中文网站吗？（中国語のサイトには入れますか？）
18. 你想去中国吗？（あなたは中国に行きたいですか？）
19. 你想去中国旅游还是去留学？（中国に旅行に行きたいですか、それとも留学に行きたいですか？）
20. 好！辛苦可！再见！（はい、お疲れ様でした。さようなら。）

試験は、上記の質問に対する回答を求める形で行った。下記表はその実験結果の一部である。

表 6　第２Ｔ試験成績

| 氏名 | 所要時間 | 教員発話時間（平均） | 学生発話時間 | 問題 | | | | 発話音節総数 | 発話音節総数/時間 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1 問 | 2 問 | … | 20 問 | | |
| 学生 1 | 2:32 | 0:56 | 1:36 | 3 | 2 | … | 2 | 124 | 77.5 |
| 学生 2 | 4:06 | 0:56 | 3:10 | 3 | 2 | … | 2 | 138 | 43.6 |
| 学生 3 | 3:08 | 0:56 | 2:12 | 3 | 2 | … | 2 | 132 | 60 |
| 学生 4 | 5:46 | 0:56 | 4:50 | 3 | 4 | … | | 105 | 21.7 |
| 学生 5 | 5:14 | 0:56 | 4:18 | | 4 | … | 2 | 120 | 27.9 |
| 学生 6 | 4:12 | 0:56 | 3:16 | 3 | 2 | … | 2 | 122 | 37.3 |
| 学生 7 | 4:25 | 0:56 | 3:29 | 3 | 4 | … | 2 | 128 | 36.7 |
| 学生 8 | 3:37 | 0:56 | 2:41 | | | … | 2 | 114 | 42.5 |
| 学生 9 | 2:55 | 0:56 | 1:59 | 3 | | … | 2 | 126 | 63.5 |
| 学生 10 | 2:45 | 0:56 | 1:49 | 3 | 2 | … | 2 | 115 | 63.3 |
| 学生 11 | 3:32 | 0:56 | 2:36 | 3 | 4 | … | 2 | 111 | 42.7 |
| 学生 12 | 4:20 | 0:56 | 3:24 | 3 | 2 | … | 2 | 106 | 28.4 |
| 学生 13 | 欠席 | —— | —— | — | — | … | — | — | — |
| 学生 14 | 欠席 | —— | —— | — | — | … | — | — | — |
| 学生 15 | 2:32 | 0:56 | 1:36 | 3 | 4 | … | 2 | 140 | 87.5 |
| 学生 16 | 2:56 | 0:56 | 2:00 | 3 | 2 | … | 2 | 145 | 72.5 |
| 学生 17 | 4:06 | 0:56 | 3:10 | 3 | 2 | … | 2 | 141 | 44.5 |
| 学生 18 | 3:57 | 0:56 | 3:01 | 3 | 4 | … | 2 | 145 | 48.1 |
| 学生 19 | 4:02 | 0:56 | 3:06 | 3 | 4 | … | 2 | 81 | 26.1 |
| 学生 20 | 3:48 | 0:56 | 2:52 | 3 | — | … | 2 | 110 | 38.4 |
| 学生 21 | 1:30 | 0:56 | 0:34 | — | — | … | — | 84 | 148 |
| 学生 22 | 3:08 | 0:56 | 2:12 | 3 | 6 | … | 2 | 147 | 66.8 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学生 23 | 3:23 | 0:56 | 2:27 | 3 | | … | 2 | 107 | 43.7 |
| 学生 24 | 3:54 | 0:56 | 2:58 | 3 | | … | 2 | 126 | 42.5 |
| 学生 25 | 4:12 | 0:56 | 3:16 | 3 | 6 | … | 2 | 132 | 40.4 |
| 学生 26 | 4:43 | 0:56 | 3:47 | 3 | | … | 2 | 77 | 20.4 |
| 学生 27 | 4:55 | 0:56 | 3:59 | 3 | | … | 2 | 86 | 21.6 |
| 学生 28 | 3:27 | 0:56 | 2:31 | 3 | 1 | … | 2 | 103 | 40.9 |
| 学生 29 | 2:17 | 0:56 | 1:21 | 3 | 4 | … | 2 | 124 | 91.9 |
| 学生 30 | 2:47 | 0:56 | 1:51 | 3 | 2 | … | 2 | 140 | 83.2 |
| 学生 31 | 3:32 | 0:56 | 2:36 | 3 | 2 | … | 2 | 122 | 46.9 |
| 学生 32 | 3:05 | 0:56 | 2:09 | 3 | 4 | … | 2 | 114 | 53 |
| 学生 33 | 2:04 | 0:56 | 1:08 | 3 | 2 | … | 2 | 141 | 75.5 |
| 学生 34 | 3:14 | 0:56 | 2:18 | 3 | 6 | … | 2 | 134 | 58.3 |
| 学生 35 | 2:46 | 0:56 | 1:50 | 3 | 4 | … | 2 | 121 | 66 |
| 学生 36 | 3:00 | 0:56 | 2:04 | 3 | 4 | … | 2 | 127 | 61.5 |
| 学生 37 | 3:40 | 0:56 | 2:44 | 3 | 2 | … | 2 | 108 | 39.5 |
| 学生 38 | 2:57 | 0:56 | 2:01 | 3 | | … | 2 | 123 | 61 |
| 学生 39 | 3:33 | 0:56 | 2:37 | 3 | 2 | … | 2 | 122 | 46.6 |
| 学生 40 | 3:48 | 0:56 | 2:52 | 2 | | … | 2 | 100 | 34.9 |
| 学生 41 | 欠席 | —— | —— | — | — | … | — | — | — |
| 学生 42 | 3:00 | 0:56 | 2:04 | 3 | 2 | … | | 85 | 41.1 |

上の表を左から順にみていく。まず、学生の名前はすべて「学生〇」のように番号を付して名前は伏せてある。次の「所要時間」というのは教員の質問と学生の発話の合計時間で、録音にかかった時間の総数である。そこから「教員の発話時間の平均」（上の質問文を読み上げる時間は平均 56 秒）を引いて、「学生の発話時間」を求める方式をとっている。教員が何度も質問したり、ゆっくりと言い直したりする時間は、「学生の発話時間」＝「学生の持ち時間」として加算することとした。聞き返す時間も含めて学生の持ち時間とする訳である。そして、「学生の発話時間」＝「学生の持ち時間」内に、「中国語の音節として意味を認識でき、さらにこの対話に関わりあると認識できる発話数」を言い間違いも含めて設問ごとに集計し、積算したのが「発話音節総数」である。これを時間で割ることによって、次に一分あたりに発話した音節数を求めたのが「発話音節総数/時間」つまり中国語で言う「語速」にあたる。単純に考えて、この数値が高い方が流暢に発話し、少ない方は発話が滞ったり何度も聞き返したりしたことになる。なお、「学生 21」は、たまたま本試験において中国語環境で育ったため会話の上ではネイティブのように発話できることが分かった学生である。この

数値と比べると、ほかの学生の発話速度がネイティブとどのくらい違うか読み取れるのではないかと思う。

なお、「問題」の下の各設問の回答音節数をみると、ほぼ同じ音節数となっているのは、質問が一問一答形式であり、またこの質問の多くが教科書の対話そのもので、回答もほぼ一律であったためである。前期期間の会話試験としては自由度も低くこのような結果となることは仕方のないことではある。ただ、次節にも言う一年修了時の試験との比較をするためにも、数値を出しておくことにした。

## ８．学習効果の測定（２）―第 4T(1 年修了時)の会話力測定

10 月以降、広島大学の第 3 ターム、第 4 タームも引き続きコロナ・ウイルス蔓延の状況に大きな変化はなく、結果的に 1 年間すべて同様の形でのオンライン授業が行われることになった。我々の教員チームも、8 月までに培ったノウハウをもとにほぼ同様の形式を保ちつつ一年間の教育を終えることになった。授業進度は『新概念漢語』（全 30 課)で言えば第 27 課までと、例年と比べて若干進度は遅かったが、「補語成分」の説明を一通り終えるところまではたどり着くことができた。

第 4 ターム修了時にも、第 2 ターム修了時と同じように会話力の実験を行った。ただ、第 2 タームの実験との違いは学生の会話力が高まり、会話も一問一答形式で同じ回答を求めるものではなく、学生の回答によって次に続く質問が変わるようになったことである。こうした予測から、試験問題もいくつかも質問をパタンとして定め、その範囲内で臨機応変に対応させつつ試験を行った。教員の質問と学生の会話は必ずしも一律ではないものの、質問に用いる文法項目はシラバス上第 3、第 4 タームで教育した内容を使用し、その質問に対する学生の発話速度を見るという点では公平でありかつ、会話力を見る指標となり得ると判断したのである。

ただ、そのような調査の場合、人力ですべてを計測している現状では、全数のデータの分析は相当の時間を要すので、今回は試験的に「学生 23」から「学生 30」を中心として調査を行った（表 7)。このうちの「学生 27」は欠席だったが、これを除く 7 名の平均値を見た場合、第 2 タームの実験で全体平均 52.6 音節/分に近い 48.7 音節/分という点で、2T から 4T への全体の数値の変化を見るうえで適当と思われる。

表 7　第 4T 修了時の会話速度測定（部分）

| 氏名 | 所要時間 | 教員発話時間（平均） | 学生発話時間 | 問題 | | | | 発話音節総数 | 発話音節総数/時間 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1 問 | 2 問 | … | 20 問 | | |
| 学生 23 | 5:40 | 1:26 | 4:14 | 7 | 4 | … | - | 189 | 44.6 |
| 学生 24 | 4:06 | 1:15 | 2:51 | 10 | 11 | … | - | 154 | 51.9 |
| 学生 25 | 4:34 | 1:44 | 2:50 | 3 | 22 | … | 3 | 179 | 63.2 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学生 27 | 7:03 | 1:35 | 5:28 | 12 | 8 | … | – | 184 | 33.7 |
| 学生 28 | 3:33 | 1:35 | 1:58 | 5 | 9 | … | – | 153 | 77.8 |
| 学生 29 | 4:03 | 1:54 | 2:09 | 13 | 8 | … | 2 | 154 | 71.6 |
| 学生 30 | 4:39 | 2:07 | 2:32 | 6 | 5 | … | 6 | 245 | 96.7 |

まず、発話音節（総数/時間）を見ると、平均値 62.8 音節/分と第 2 ターム時と比べる 29.0%ほど速度が向上していることがわかる。ネイティブ環境で育った学生が 148 音節/分という高い数値を出していたことを思えば半分程度の速度ではあるものの、学習歴一年という大学一年生の平均数値としては満足のいく数値ではないか。

なお、以下は上記 7 名の学生が実際に調査時に発話した内容である。紙幅の関係で上記のうち比較的速度の速かった「学生 28」～「学生 30」のみをあげておく。

【学生 28】対話所要時間 3 分 33 秒
Q1:你是广岛人吗？ A:我是广岛人。(5)
Q2:你去过和平纪念公园吗？A:我去过和平纪念公园。(9)
Q3:你去过几次？A:我去过很多次。(6)
Q4:最近你是和谁一起去的？ A:最近我和朋友一起去的。(10)
Q5:你打工吗？ A:我打工。(3)
Q6:你在哪里打工？A:我在三原打工。(6)
Q7:昨天晚上你也打工了吗？A:昨天晚上我没有打工。(9)
Q8:昨天晚上你做了些什么？A:我教学生。(4)
教学生？昨天晚上你做了些什么？A:上考试。(3)
上考试？A:我，我，我有课。(5)
Q9:哦，昨天晚上有课。上课上到几点钟？A:我上课上到大约九点钟。(10)
Q10:上了多长时间？A:上了，上了两个小时。(8)
Q11:你会说汉语吗？A:我会说汉语一点儿。(8)
Q12:你觉得你汉语说得怎么样？A:我觉得我汉语说得不太好。(11)
Q13:你汉语说得流利，还是英语说得流利？A:我的汉语说得比我说英语流利。(13)
Q14:中国老师的话你都听得懂吗？有时候我听得懂，有时候我听不懂。(14)
Q15:你二年级打算继续学习汉语吗？A:想一想，请你再说一遍。(9)
Q16:你二年级打算继续学习汉语吗？A:我继续学习。(5)
Q17:汉语课对你有帮助吗？A:汉语课我有帮助。(7)
Q18:很好！今天的考试就到这里。辛苦了。 A:哪里哪里。谢谢。(6)
Q19:再见！A:再见！(2)

【学生 29】对話所要時間 4 分 03 秒
Q1:你是不是广岛人吗？A:我不是广岛人，我是,我是大分人。(13)
Q2:你现在住在哪里？A:我现在住在东广岛。(8)
Q3:一个人住在东广岛的…一个人住在东广岛吗？A:对。对。(2)
Q4:很好。啊，平时你在家喜欢悠哉游哉地做些什么呢？A:啊，我喜欢，平时我在家喜欢看电视。(14)
Q5:悠哉悠哉地看看电视。 A:是。(1)
Q6:你看什么节目？A:我看综艺节目。(6)
Q7:你有没有电子词典？A:我没有电子词典。(7)
Q8:你有没有钱包？A:我，啊，我有钱包。(6)
Q9:现在拿得出来吗？A:可以拿出来。(5)
Q10:能不能拿出来给我看一下。A:好，我拿出来。这是我的钱包。(11)
（教育的説明 8 秒）
Q11:能不能拿出来给我看一下。A:好，能拿出来给你看一下。(10)
Q12:谢谢我看到了。请你把它放进书包里去吧。A:知道，知道。(4)
（教育的説明 13 秒）
Q13:你学了多长时间汉语了？A:学了十月了。(5)
Q14:十个月。你觉得你汉语说得怎么样？A:我觉得我汉语说得不太好。(11)
Q15:你汉语说得流利，还是英语说得流利？A:我汉语说得流利。(7)
Q16:你怎么学习汉语？A:我。☐我做我朋友一起学习会话。(12)
Q17:和。好。汉语课对你有没有帮助？A:汉语课对我有帮助。(8)
Q18:你喜欢什么样的汉语课？A:我喜欢，多会话的汉语课。(10)
Q19:二年级你打算继续学习汉语吗？A:我，我打算继续学习汉语。(10)
Q20:你说得很好！A:谢谢。(2)
再见！A:再见！(2)

【学生 30】对話所要時間 4 分 39 秒
你好！老师好！
我们开始考试。
Q1:你是不是广岛人。 A:我不是广岛人。(6)
Q2:你是哪里人？ A:我是京都人。(5)
Q3:那，你去过广岛的和平纪念公园吗？ A:我去过和平纪念公园。(9)
Q4:去过几次？ A:我去过一次。(5)

Q5:你是什么时候去的？ A:我高中生的时候去的。(9)
Q6:后天几月几号星期几？ A:后天，二零二一年二十五号星期五。
二十五号？ A:后天？后天…后天二十五号…。
二十五号？25 日ですか？ A:啊，啊，啊，二月五号星期五。(34)
Q7:你有空吗？ A:我，啊，我想一想，今天我没空。
后天你有空吗？ A:后天，啊，后天，后天我想一想，上午我有课，下午我没事儿。(33)
Q8:星期天你喜欢悠哉游哉地做些什么呢？ A:看看电视听听音乐，有时候还上上网。(15)
Q9:好，那，昨天晚上你做什么了？ A:昨天晚上我学习汉语啊。(10)
Q10:你学到几点钟？ A:我学到九点钟。(6)
Q11:学了多长时间？ A:学了两个半小时。(7)
Q12:你平时怎么学习汉语？ A:我平时看课本学习汉语。(10)
Q13:你觉得你汉语说得怎么样？ A:啊，我觉得我说的汉语，不好。(11)
Q14:说的很好。你汉语说得好，还是英语说得好？ A:我觉得我说的英语比我说的汉语好。(15)
Q15:哇！那，你说的英语说得非常好。 A:哪里哪里，还差得远呢。(9)
Q16:你觉得汉语课对你有帮助吗？ A:对不起，请再说一遍。(8)
你觉得汉语课对你有帮助吗？ A:啊，学，学汉语对有帮助。(9)
Q17:你喜欢什么样的汉语课？ A:我喜欢，说的汉语课。(8)
Q18:中国老师的课，你都听得懂吗？ A:中国老师的课，我都听得懂。(11)
Q19:二年级你打算继续学习汉语吗？ A:我打算学习汉语。
继续学习汉语？ A:继续学习，对，啊，继续学习汉语。(19)
Q20:今天的和考试就到这里。辛苦了。 A:哪里哪里！
再见！ A:再见！(6)
＊⊠は意味の聞き取れない音節。

以上のように、被験者への質問は同じではなく、本教育方法での教育成果として、単なる文の丸暗記ではなく、話したい内容を個々人で創出しているという実態がわかるであろう。また、回答もそれぞれ異なり、異なる話題へと内容が発展する様子も見て取れると思う。

なお「学生 28」に対する「(教育的説明 8 秒)」というのは、出題者が定期試験を行うという立場上、フルセンテンスをもって答えるように教員が要求している場面であるが、これがなくても会話は成立していることになるのでその分時間は除外している。また言い間違えた言葉を言い直す場面なども、中国語でのやり取りであればすべて有

意な発話としてカウントしている。意味を理解できなかった音節は⍰とし、これは有意の音節としてはカウントしていない。

上記のような調査の場合、上にも言う「中国語の音節として意味を認識できかつこの対話に関わりあると認識できる発話数」という定義があいまいに思われるかもしれない。ここでは、聞き手としての教員にゆだねられるという、客観性をやや欠くというべきか、常に同じ基準で判定し得るかという問題はある。また、上級になった場合、単純な回答と高度な文法項目や単語を使った場合の差がつかないという問題点もあるなど、思いつくだけでもいくつもの問題点を指摘し得る。ただ、この方法による換算が、担当複数教員の成績判定とほぼ相関関係が見られたこともまた事実である。中国語教育担当者としてはしばらくこの方法の可能性を模索してみたいと考えている。

## ９．まとめ

本稿では、2020 年度というコロナ・ウイルス蔓延の状況下で、広島大学での初修外国語（いわゆる第二外国語）科目のうち、一部の中国語科目において行ってきたオンライン授業の状況とその効果についてまとめてきた。第７節では第 2Ｔ試験における会話速度の試験を試みたが、順次他の年度、他の学期における成績についても調査を進め、比較を行っている。

総じて、4 月から一年間、コンテンツ作成と配信、それと Teams、Zoom などのテレビ会議システムを利用した双方向型授業を組み合わせて行った結果、我々のメソッドの根幹にある「文法項目の段階的理解」、「学習者同士でコミュニケーションできる会話内容」のコンテンツによる「スプーン・フィード」、その内容を実際に会話として楽しむ Zoom によるグループワーク、ペアワーク、Teams 授業による発音指導、会話発展のためのスキル指導が一応は達成できており、少なくとも授業効果としてはある程度のレベルを維持することができたと言うことはできそうである。ただ、今年度は教員が不慣れだったこともあり、学生の積極性に頼る度合いが高く、授業を欠席し、試験までも欠席する学生の比率が高かったというのも本年度の問題と言えた。第 2Ｔの試験でも点数のばらつきが目立ち、第３Ｔには履修登録を取り消す学生が例年に比べて多かったというのは最大の反省点といえた。学生の立場からすれば、「教室にいればもう少し勉強できたのに」と思う者は多かっただろう。コロナ・ウイルス蔓延がいつまで続くかわからない状況において、こうした点は早期に解決方法を検討しなければならない問題である。

総じて、2020 年度の活動を通じて、効果があった、良かった点を挙げるとすれば、教員のオンライン授業へのスキル向上につながったこと、コンテンツ開発に弾みがついたこと、オンライン教育への可能性が模索されるようになったことかもしれない。このオンラインによる教育は、遠隔地在住の学生に対しても一定の効果があり、将来

的発展の可能性を示すことができたことは重要である。今日は、中国文献学的観点から言えば、口頭伝承、木簡、巻軸写本、印刷と、1000 年程度に一回起こる「情報メディア革命」のさなかにある。教育方法の変化も近年ではしばしば意識されてきたことだが、確かにここ数年を振り返れば、その歩みは決して早いとは言えなかった。それが、ここ一年は、コロナ・ウイルス蔓延が契機となり一挙に推し進められることになったのである。今後、この新しいメディア、ツールを利用した、如何なる教育方法が開発され、教育がどの方向に進んでいくのか、語学教育担当者も含めて極めて重要な時期に入ると確信する。その状況を蚊帳の外から見るのではなく、皆が当事者としてさらなる研鑽を積んでいきたい、と強く考える次第である。